



fig. 1 平城京朱雀大路発掘調査位置図

I 調査概要

これまでの調査 朱雀大路は、平城京の羅城門と朱雀門を結ぶ京の中心街路であり、遺存地割や発掘調査の蓄積によって朱雀大路の詳細は明らかになりつつある。朱雀大路に関連した調査としては、昭和38年度に奈良国立文化財研究所が、平城宮第16次調査として実施した朱雀門の調査がある。昭和44・45・46年度には、奈良市・大和郡山市の依頼により同研究所が実施した羅城門とその周辺の調査で、羅城門の規模を推定する資料を得、また、朱雀大路西側溝もこのときはじめて検出された。

昭和44・45年度に、奈良市は平城京保存調査会を組織して「遺存地割による平城京の復原調査」を行い、水田畦畔や水路などによって平城京の条坊を復原し、朱雀大路の幅員は、延喜式の記載（築地心々28丈）に近い規模をもつことが知られた。

昭和48年度に、奈良市は国庫金を受託して、朱雀大路発掘調査を実施した。この調査は、奈良市による朱雀大路復原整備計画のための基礎資料を得る目的で行われたもので、調査位置は、朱雀大路が五条・六条の条間路と交叉する部分の北側にあたる。先に行なった



fig.2 発掘区周辺の地形と条坊



fig. 3 発掘区周辺航空写真 1 : 500 (昭和57年撮影)

「遺存地割による平城京の復原調査」の成果を踏まえて、さらに朱雀大路発掘調査の予備調査として、遺存地割・地名による平城京の復原調査が補足充実された。

このときの発掘調査では、はじめて朱雀大路の東・西側溝を同時に確認し、道路幅員が明らかになり、遺存地割の水田畦畔は築垣の位置をほぼ踏襲していることが推定された。さらに、大路両側溝の内側には朱雀大路の前身の下ツ道の両側溝も確認されている。

昭和56年に、奈良国立文化財研究所は平城宮南面大垣の調査（平城宮跡第130次調査）に付随して、朱雀門東南方の朱雀大路東側溝と二条大路北側溝の交点を調査し、さらに翌57年には、朱雀門西側の対称位置において朱雀大路西側溝と二条大路北側溝の交点の調査（平城宮跡第143次）を行った。

以上の調査によって、朱雀大路の南端（羅城門周辺）と北端（朱雀門脇）および、その中間地点の大路の形状が明らかにされた。

今回の調査は、奈良市としては昭和49年度の調査に続く、朱雀大路復原整備のための第2回目の調査に当り、同大路の保存整備を具体的に立案する資料を得るために実施した。

調査地区概要 発掘調査地は、奈良市二条町南3丁目1-1番地 福丸雄三氏所有地と、同193-1番地 石田 瀨氏所有地である。同地は南北に細長い水田耕作地二筆が東西に並び、南は現二条通りに接し、東、西には建物が建ち、二条通沿いにあるは、残り少ない水田耕作地の一画となっている。

両水田の中央の畦畔は、朱雀大路の東を区画する遺存地割と推定される位置にあり、西半水田には大路路面と東側溝、東半区には左京三条一坊二坪の敷地西南隅にかかる遺構が予想された。したがって、朱雀門心から南約260mの位置に、東西いっぱい幅5m、長さ25mの東西トレンチを設定し、中央畦畔を残して約120㎡の発掘調査を行った。

発掘調査は、奈良市教育委員会の依頼により、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が担当し、調査期間は昭和57年11月8日から同16日までの9日間である。

Ⅱ 遺 構

発掘区は、水田耕作地で、土層は上から耕作土（約20cm厚）、床土（黄褐色粘質土、5～10cm厚）、遺物包含層（暗灰褐色粘質土層）が堆積し、遺物包含層下に遺構を検出した。

検出した遺構は、朱雀大路路面と同東側溝、左京三条一坊の坊垣築地基礎部と、同坊二坪内の大土塋である。また、発掘区の東半部には中世にかかると思われる細い溝状遺構を数条と小土塋を検出したが、東端部の中世溝は奈良時代土塋と重複しているために、遺物を選別後削平した。

朱雀大路路面 発掘区西端部に約7m幅の大路東端部路面と東側溝の一部を検出した。溝肩から路面まで約2m程は、緩やかな傾斜をもつ。路面部には、暗灰粘土層の地山上に約10cm厚の灰黄粘土を敷き、さらにその上に灰色砂層が約15～20cm厚に堆積している。この砂